

総合文化研究所 Workshop Series 第五回

「ウクライナの『串刺し公』『イエレミーヤ・ヴィシユネヴェーツイケイイ公』を巡る考察」

報告 原真咲

本報告では、ウクライナの作家イワーン・ネチューイーレヴィーツイケイイ (Іван Нечуй-Левицький、一八三八～一九一八) の小説『イエレミーヤ・ヴィシユネヴェーツイケイイ公』(«Князь Єремія Вишневецький») 執筆一八九七年、公刊一九三二年) において、裏切り者の「妖怪変化」と非難される主人公が実際どのように描かれているのか、彼の怪物性とその要因について解析した。

歴史上実在の人物であるイエレミーヤ・ヴィシユネヴェーツイケイイ公(一六一二～五二)は、ウクライナのかつての君主の家系に生まれた当りきつての大大名であった。しかし、父祖伝来のギリシア正教から新しい支配者ポーランド人のローマ・カトリックへ改宗し、あまつさえ、ウクライナの独立戦争で独立運動の弾圧側に立ったことから、稀代の裏切り者として語り継がれることとなった。彼には彼の正義があったのであるが、敵対者に対する残酷な刑罰の数々が、決定的に領民の心を彼から遠ざけたのである。年代記は記す。「イエレミーヤ公は」暴君の如く人々を串刺しにしたのだが、その者らの多くは無実であった。この迫害によって、世間と自らの領民の好意を失い、己に対する怒りの焔を彼らの心に燃え上がらせたのであった」(Величко С. Листопись собитий в

Юрозападної Росії в XVII-мъ вѣкѣ. Київ, 1848. Т. I. С. 95)。

そもそも、ヴィシユネヴェーツイケイイ公の一門は、歴史にその名が現れてより代々、ウクライナの地と民、その信仰(正教)の守護者として賞賛を受けてきた。なかでも、「ドメイトロー・ヴィシユネヴェーツイケイイ公は、ウクライナの国民的英雄であるコサックたちの梁山泊、「ザポロージュヤ城柵」の開祖として名高く、「コサックのバーイダ」という名で民謡にも謡われた。ネチューイーレヴィーツイケイイが描いたのは、この英雄バーイダの末裔の転落の物語である。

小説は、十七世紀ウクライナ最大の事件である「フメリネーツイケイイの乱」(一六四八～五七)を、事件の《英雄》側からではなく《敵》側から描く点に特徴がある。事件の主役であるはずの指導者フメリネーツイケイイはほとんど登場せず、専ら敵方の《英雄》であったイエレミーヤ公の苦悩に焦点が当てられる。ネチューイーレヴィーツイケイイは、イエレミーヤ公の暴虐の裏に精神的な病理を見出そうとしたのである。

作家は、しばしば見られるような、ウクライナの独立戦争に登場する敵方の型通りの悪人の記号としてではなく、彼自身が持つウクライナ人生来の意固地さと、周囲の悪意に絡め取ら



れて道を誤った、苦しむ一人の人間として公を理解しようとした。だがしかし、事件当時の文献史料や後世の年代記の記述を基に描かれるその暴虐は、彼に人ならぬ怪物性を賦与するのである。

イエレミーヤの病理は、絶え間ない周囲からの精神的・政治的圧迫と、それを撥ねつけんとする自尊心の葛藤に起因する。その心は本人も気づかぬうちに傷つけられているが、それと同時に、虐待の反動により極端なまでの力への渴望と依存、周囲のすべてを見下す高慢な自我が形成される。ポーランド人から受けた差別と圧力、それに対し父祖伝来の信仰を死守するよう脅迫する母の板挟みとなり、至高の権力を得るため差別者側へ改宗したイエレミーヤには潜在的な激しい自己嫌悪が植え付けられる。

自己嫌悪は、自らの所属する集団への憎悪として表出する。それは、第一に同じウクライナの民であるコサックや領民である。彼らに対する厳しい刑罰は、自己処罰願望の発露である。それはやがて、自分が組み合わせたポーランド人への憎悪へ転換し、この世のすべてを憎むこととなる。

マリー・ボナパルトはマゾヒズムやサディズムの根源として、細胞膜を突き通す／体内への「侵入」を挙げ、その状態を三つにまとめる。すなわち、栄養摂取に役立てられる物質に対する欲求、性の相手に向かう性的傾向、苦痛や死をもたらすかもしれない傷害に対する恐怖である（佐々木孝次訳『クロノス・エロス・タナトス』せりか書房、一九六八年、三〇頁）。これは、強烈なサディコ・マゾヒスティックな欲求の持ち主であるイエレミーヤの行動に当て嵌められる。一点目は、武力行使を伴う貪欲な領地拡大である。そして、二及び三点目の結合し

た形として、領民に対する《串刺し》の狂宴を見ることができ

る。イエレミーヤ公の怪物性は、スラヴを本領とするヴァンピール（吸血鬼・浪人）的表象をなす（但し、執筆時期が並行するため、ストーカー『ドラキュラ』からの影響は考えられない。とはいえ、ヴァンピールの眷属はスラヴ文学によく登場する）。その特徴を対比すれば、彼の怪物性が際立つ。すなわち、繰り返し描写される、女性を虜にもした恐れを抱かせもする、あまりに魅力的な情熱的眼力（被害者に暗示をかける吸血鬼の赤い邪眼）、貴族性（エリート性）、腐敗しない遺体（イエレミーヤ公のミイラは保存されていると信じられている／ヴァンピールの原義は死しても体の腐敗しない不・死者である）であり、イエレミーヤが作家によって「妖怪変化」と呼ばれることも、ヴァンピールの持つ変身能力——狼や熊、犬猫蝙蝠などの動物、干し草の山、夜霧などに化けることができる——を想起させる。エリート性、すなわち際立った個人という特質は、超越的個人、すなわち英雄性の表れである（それが善であるか悪であるかは重要ではない）。イエレミーヤの世界は、その極めて高貴な血筋、ウクライナの広大無辺の領地と無尽蔵の富、強力無比の兵力、倦むことを知らぬ知力体力、身体的及び装飾の美、感情の激高と憂鬱、大仰な罵詈雑言、延々と続く酒宴など、誇張法によって彩られているが、あらゆる過剰性は英雄性に結びつくと同時に、怪物的である。

だが、彼を彩る怪物的世界はすべてウクライナから出たものである。作家が描いたのは、ウクライナを痛めつける非ウクライナの悪党ではなく、世界と折り合いをつけられなくなつた、あくまでウクライナ人の表象なのである。

発表日 二〇一七年五月二十二日（月）